様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００７２７

研究課題名（和文）サッチャリズムの歴史的前提　民衆的アーカイヴの構築による1970年代の再検討

研究課題名（英文）Thatcherism in the Making : the People's Archive and Reassesing 1970s Britain

研究代表者
長谷川　貴彦（HASEGAWA, TAKAHIKO）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：７０２９１２２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後イギリス史の分水嶺を形成するサッチャリズムの前提となる1970年代の状況を「下からの」アプローチによって明らかにしようとした。とりわけ、「民衆的個人主義」をキー概念に独自の検討をおこなった。それは、戦後福祉国家のなかで自己決定権を高めてきた民衆レベルでの個人主義であり、この意識がサッチャリズムによって大衆資本主義へと変容していったという問題意識に基づく。具体的には、若者文化（サブカルチャー）、移民、女性、教育・貧困問題などをとりあげて、1970年代という転換期のアモルファスな社会意識を、オーラルヒストリーやエゴドキュメントなど民衆的アーカイヴを活用することによって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
サッチャリズムの研究は、主として政治学や経済学のアプローチから蓄積されてきたが、同時代の資料公開が進むなか本格的な歴史研究が試みられるようになり、そこでは、社会や文化の変容と絡めてサッチャリズムの再評価する傾向が強く、本研究においては「民衆的個人主義」（popular individualism）をキー概念に検討をおこなった。

研究成果の概要（英文）：This research project tried to clarify the situation in the 1970s, the premise of Thatcherism, which formed a watershed in postwar British history, from a "bottom-up" approach. In particular, we conducted our own examination of the key concept of "popular individualism. This is based on the problematic notion that individualism at the level of the common people has increased the right to self-determination in the postwar welfare state, and that this consciousness has been transformed into mass capitalism through the advent of Thatcherism. Specifically, we have taken up issues such as youth culture (subculture), immigrants, women, education and poverty, and have clarified the amorphous social consciousness of the 1970s, a turning point, by utilizing oral histories, ego-documents, and other popular archival sources.

研究分野：イギリス現代史

キーワード：サッチャリズム　1970年代　民衆的個人主義　エゴドキュメント

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景：

直近の歴史を対象とすることは、歴史学では現代史ないしは同時代史と言われている。その現代史の概念的な枠組みは、政治家、評論家、エコノミスト、社会科学者、社会政策の専門家によってまず提出され、「現代イギリスを歴史化する最初の挑戦とは、そうした概念の有効性そのものを検証することにある」と言われる。イギリスにおける現代史の資料の公開には、長らく 30 年原則というものがあったが、2013 年の法改正によって 20 年へと短縮された。したがって、サッチャリズムの研究も、これまで主として政治学、経済学、社会学のアプローチから蓄積されてきたが、資料公開が進むなかで本格的な歴史研究が試みられるようになってきている。

さらに同時代の歴史化の試みには、比較史や中長期的な構造的視点が必要とされる。事実、イギリス戦後史の再検討は、比較史や中長期的な視点によっておこなわれている。たとえば、いわゆる衰退論争では、英国病ともいわれる経済衰退が後進国との比較による相対的なものだったことが指摘され、近年では、デヴィド・エジャトンの「戦争国家」論が、衰退論を「反歴史」的であるとして抜本的な批判を加えている（デヴィド・エジャトン『戦争国家イギリス』（名古屋大学出版会、2017 年）。

こうした研究は、逆に戦後史の分水嶺となるサッチャリズムの登場を十分に説明しえていない。もしイギリスが他国と比較しても衰退していなかったとしたら、なぜにサッチャリズムが登場したのであろうか。あるいはまた、ストライキやデモの発生件数でピークを示す 1970 年代に、なぜにサッチャリズムへの振幅が生じたのであろうか。問題は、1970 年代の歴史を焦点として戦後史の抜本的な再検討へと進んでいくことになる。

２．研究の目的：

本研究は、戦後イギリス史の分水嶺を形成するサッチャリズムの歴史的前提となる 1970 年代の状況を「下から」のアプローチによって明らかにしようとするものである。これまでの 1970 年代イギリスのイメージは、陰鬱なものであった。帝国の盟主たる地位からの転落とヨーロッパ経済共同体への加盟、石油危機によるインフレと失業の加速、国際通貨基金（IMF）からの借款、人種間の対立や北アイルランドの紛争、繰り返されるストライキ、パンク音楽やフーリガンといった「無軌道」な文化の噴出といった具合である。だが最近では、「危機や混乱の時代」というイメージに対する反証が提示されるようになっている。完全雇用と平等化に基づく豊かな民衆の文化が開花し、民衆が自己決定権と自己実現を追求していった多様な可能性が内包されていた時代であり、サッチャリズムは、危機への不可避的な解決策ではなく偶然の結果であったとされている。

したがって近年、「民衆的個人主義」（popular individualism）をキー概念として戦後史を再検討する新たな潮流が、中堅・若手の気鋭の研究者のなかから発生している（Camillia Schofield et al, “Telling Stories about Post-war Britain: Popular Individualism

and the ‘Crisis’ of the 1970s”, Twentieth Century British History, vol.28, no.2, 2017)。「民衆的個人主義」とは、戦後福祉国家のなかで自己決定権を高めてきた民衆レベルでの個人主義であり、それは、のちに市場の自由・選択の自由を強調するネオリベラリズム的個人主義（大衆資本主義）に回収されていくことになる。近年の研究は、この意識の変化がサッチャリズムの社会的基盤となったという問題意識に基づく。労働者、若者、女性、移民などのマイノリティの自己決定権の高まりというかたちで展開する「下から」の民衆的個人主義の進展と、それに対する「上から」の権力的抑圧とニューライト的枠組みへの回収という対抗関係によって、1970年代の歴史過程が描かれることになる。

３．研究の方法：

本研究は、戦後イギリス史の分水嶺となるサッチャリズムの歴史的前提である1970年代の状況を「下からの」アプローチによって明らかにしようとする。上述のように、これまでサッチャリズムの研究は主として政治学や経済学などのアプローチによって蓄積されてきたが、同時代資料の公開が進むなかで本格的な歴史研究が試みられるようになってきている。そこでは、とりわけ社会や文化の変容と絡めてサッチャリズムを分析する傾向が強く、本研究においては、とりわけ「民衆的個人主義」（popular individualism）をキー概念に独自の検討をおこなう。

本研究では、具体的には、若者文化・サブカルチャー、女性、移民、エスニシティ、貧困、大学問題などの領域をとりあげて、1970年代という転換期のアモルファスな社会意識をオーラルヒストリーやエゴ・ドキュメントの民衆的アーカイヴの蓄積を活用することによって明らかにしていきたい。ここでいう「民衆的アーカイヴ」とは、マイノリティや社会運動の参加者についてのオーラルヒストリーやエゴ・ドキュントを指し、そのなかにはデジタルアーカイヴ化されたものも少なくない。英国図書館編の女性解放運動史に関するSisterhood and After およびより一般的な National Life Stories Collection、地方レベルでのオーラルヒストリーのアーカイヴなどが名高いものとなっている。

４．研究成果:

(1)　個別研究：

研究代表者の長谷川貴彦は、「民衆的個人主義」概念の整理をおこなうなど研究全体の統轄とともに、福祉国家体制のもとで撲滅されたかに思われた貧困が1960-70年代に再発見されていく経緯について、住宅問題に関する反貧困運動に関わった当事者の記録から明らかにする。具体的には、ロンドン・ノッティングヒル地域で展開したコミュニティ・アクションとその指導者であったジャン・オマリーのエゴ・ドキュメントやオーラルヒストリーから明らかにしていった。

研究分担者の市橋秀夫は、これまで４つの分野(演劇・映画・スポーツ、男性同性愛、1960年代の社会規範変容、市民団体の歴史)の研究に取り組んできたが、これらは戦後イギリス

社会の社会と文化の特質を理解し、その歴史的変容あるいは連続を明らかにしようとする点で共通しており、「豊かな社会」（1950 年代後半から 1970 年代初頭）の到来とイギリスの社会および文化の変容の関係を問題とする。本プロジェクトでは、若者文化や同性愛などサブカルチャー全般をオーラルヒストリーの成果に依拠して明らかにした。

岩下誠は、1974 年から 75 年にかけてロンドン・イズリントン区で生じた学校紛争、「ウィリアム・ティンデール校事件」を事例として取り上げ、歴史的な検証を加えた。ウィリアム・ティンデール校事件とは、1974 年から 75 年にかけてロンドン・イズリントン区で生じた学校紛争の通称である。イギリスにおける新自由主義教育改革の露払いとなったラスキン演説（1976 年 10 月）が、同時代の「教育の荒廃」を象徴するエピソードとして言及したのがまさにこの事件であり、その後の教育言説においても「進歩主義教育の挫折」「新自由主義改革の起点」というイメージ先行の位置づけがなされてきたが、基礎的な史料をもとにティンデール校事件を事実に即して再構成することによって、新自由主義教育改革ナラティヴを批判的に検証することを試みた。

梅垣千尋は、イギリスで女性解放運動（Women’s Liberation）の運動を担ったフェミニストたちのオーラルヒストリーをもとに、1970 年代における女性たちの社会意識にどのような変容が生じたのかを明らかにする。具体的な資料としては、英国図書館が 2013 年から公開を開始した Sisterhood and After というオーラルヒストリーのプロジェクトを活用し、このアーカイヴに収められた 60 名ほどの参加者たちの語りを分析した。とくにイギリスの女性解放運動はニューレフト運動とのつながりが深く、またバーバラ・テイラーやシーラ・ローボタムといったフェミニスト史家が運動の中心的な役割を果たしたこともあきらかにした。

小関隆は、「民衆的個人主義」の涵養において重要な役割を果たす 1960 年代の文化革命に対する反動が噴出した時代として 1970 年代を捉える立場から、サッチャリズムの前提としての女性の大衆的保守運動家であるメアリ・ホワイトハウスに着目した。近著『イギリス 1960 年代』は、「文化革命」を論じながら、そこに胚胎される個人主義、同時代的現象として進行した社会の寛容性ないしは許容性、「許容」を批判するモラリズムを指摘することによって、サッチャリズムの登場を導出しようとしている。

浜井祐三子は、1968 年人種関係法のセクション２（「品物、施設、サーヴィスの提供」）の規定に基づいて、人種差別を受けたとする訴えへの対処の内実を、「人種関係協議会」の記録によって明らかにした。特にここで注目したのは、1970 年代（76 年の人種関係法改正あたりまで）のダンスホール／ディスコでの人種差別の事例である。入店を断られるなどの不当な扱いに憤慨し訴えを起こした人々の多くはアフロ・カリブ系「黒人」の若者であった。地域の調停委員会が調査・聞き取りに基づき調停を行うものの、大抵の場合、訴えと店側との主張は一致しない。被害者側の訴え、聞き取りの内容、店側やその他関係者とのやりとりを含め、残された詳細な記録に浮かび上がるのは、「肌の色」による差別を受けていると訴える人々（多くが移民第二世代の若者たち）の差別への抵抗であり、当事者と

それを取り巻く人々（証人、「人種関係協議会」担当者、法律家など）との関係性であり、「人種」「階級」「ジェンダー」の複雑な交差の様相であった。

尹慧瑛（ユン・ヘヨン）は、北アイルランドにおいて公民権運動の高まりで先鋭化してくる「カトリック」と「プロテスタント」の対立を背景に英国国内で頻発するテロリズムのなかでさまざま差別と偏見の下に置かれたエスニック・マイノリティ「在英アイリッシュ」の経験に焦点をあてる。在英アイリッシュは、多くがアイルランド移民の第三世代であり、現地民として土地に根ざしつつ、テロによって強化される差別意識のなかアイデンティティの揺らぎを経験していた。ここでは、とりわけ 1970 年のパブでの爆発事件で有名なバーミンガム地域を取り上げて、在英アイリッシュの具体的経験を描くことにする。

（2）全体的成果：

① 日本西洋史学会シンポジウム：

本シンポジウムにおいては、「民衆的個人主義」（popular individualism）をキー概念に独自の検討をおこなった。それは、戦後福祉国家のなかで自己決定権を高めてきた民衆レベルでの個人主義であり、この意識がサッチャリズムによってネオリベラル型個人主義へと変容・転轍されていったという問題意識に基づいている。報告では、具体的に、教育問題、移民や女性などの領域をとりあげて、1970 年代という転換期のアモルファスな主観性を、オーラルヒストリーやエゴ・ドキュメントなど民衆的アーカイヴを活用することによって明らかにしたいと考えている。さらにコメントでは、1960 年代の文化革命との接続、サブカルチュア全般、アイルランド移民のアイデンティティの変容といった観点から、時代の特質を浮かび上がらせことにした。

② 論文集出版計画:

上記シンポジウムをベースとした論文集の出版を計画しており、2024 年度中の刊行を目指したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 小関隆	４．巻 270
２．論文標題 書評：ローベルト・ゲルヴァルト『敗北者たち：第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか 1917-1923』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 西洋史学	６．最初と最後の頁 125-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長谷川貴彦	４．巻 49-7
２．論文標題 歴史学とポストモダン	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 203－210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Serena FERENTE & Takashi KOSEKI	４．巻 52
２．論文標題 European Crisis in Historical Perspectives	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ZINBUN	６．最初と最後の頁 65-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Shusaku KANAZAWA & Takashi KOSEKI	４．巻 8
２．論文標題 Book Review: David Cannadine, Victorious Century: The United Kingdom, 1800-1906	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The East Asian Journal of British History	６．最初と最後の頁 70-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 小関隆＆金澤周作	4．巻 9
2．論文標題 クロスオーバー書評：新書における歴史叙述をめぐって　小関隆著『イギリス1960年代 -- ビートルズからサッチャーへ --』、金澤周作著『チャリティの帝国 もうひとつのイギリス近現代史 --』を読む	5．発行年 2022年
3．雑誌名 女性とジェンダーの歴史	6．最初と最後の頁 46-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩下 誠	4．巻 64
2．論文標題 19世紀中葉アイルランドにおける国民学校制度の宗派化	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本の教育史学	6．最初と最後の頁 34～47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15062/kyouikushigaku.64.0_34	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 尹慧瑛	4．巻 7
2．論文標題 「在英アイリッシュに出会うとき」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『抗路』	6．最初と最後の頁 34－45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 尹 慧瑛	4．巻 18
2．論文標題 北アイルランドから見たブレグジット ： ピース・プロセスと連合王国の行方	5．発行年 2022年
3．雑誌名 GR-同志社大学グローバル地域文化学会紀要 = Doshisha Global and Regional Studies Review	6．最初と最後の頁 77～100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 尹 慧瑛	4．巻 52
2．論文標題 「在英アイリッシュ」を可視化する	5．発行年 2022年
3．雑誌名 社会科学 = The Social Science(The Social Sciences)	6．最初と最後の頁 25～45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 市橋秀夫	4．巻 561
2．論文標題 フェアトレードと民衆交易 ： 草の根貿易ネットワーク再考	5．発行年 2022年
3．雑誌名 生活協同組合研究	6．最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小関隆	4．巻 47
2．論文標題 アイルランド革命から「大戦後」を考える	5．発行年 2019年
3．雑誌名 九州歴史科学	6．最初と最後の頁 119－126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梅垣千尋	4．巻 73
2．論文標題 ウルストンクラフトのフェミニズム ― 理性・徳・知識における平等	5．発行年 2019年
3．雑誌名 青山学院女子短期大学紀要	6．最初と最後の頁 1－19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尹 慧瑛	４．巻 ９９０
２．論文標題 ブレグジットと南北アイルランド国境問題―英愛関係の試練	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 74-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩下誠	４．巻 265
２．論文標題 書評（岡部造史著『フランス第三共和政期の子どもと社会―統治権力としての児童保護―』）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 西洋史学	６．最初と最後の頁 86-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尹慧瑛	４．巻 第38号
２．論文標題 Irish borderが意味するもの―政治、暴力、日常―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 エール	６．最初と最後の頁 141-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長谷川貴彦	４．巻 917
２．論文標題 コービン労働党の歴史的位置	５．発行年 2019年
３．雑誌名 世界	６．最初と最後の頁 107-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長谷川貴彦	4．巻 46(6)
2．論文標題 歴史を語れば	5．発行年 2018年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 110-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 長谷川貴彦	4．巻 393号
2．論文標題 ポスト・ネオリベラリズム イギリスと日本 ： 長谷川貴彦氏(北海道大学大学院教授)に聞く	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東京	6．最初と最後の頁 2-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　5件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 長谷川貴彦
2．発表標題 疫病の時代を生きる
3．学会等名 北海道高等学校世界史研究会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 長谷川貴彦
2．発表標題 高橋幸八郎のエゴヒストリーに向けて
3．学会等名 政治経済学・経済史学会 2020 年秋季学術大会 パネル・ディスカッション
4．発表年 2020年

１．発表者名 長谷川貴彦
２．発表標題 『家族の命運』をめぐる回想 エゴ・ヒストリーとして
３．学会等名 イギリス女性史研究会・第34回研究会・合評会：ダヴィドフ＆ホール『家族の命運 ： イングランド中産階級の男と女 ： 1780～1850』名古屋大学出版会、2019年。
４．発表年 2020年

１．発表者名 梅垣千尋
２．発表標題 女性思想家の〈マイナー性〉―「愛」をめぐるウルストンクラフトのバーク批判を題材に
３．学会等名 第27回 政治思想学会研究大会 シンポジウムII「思想史を裏から読む」
４．発表年 2020年

１．発表者名 梅垣千尋
２．発表標題 家族の命運 ― イングランド中産階級の男と女 1780-1850』訳者コメント
３．学会等名 第34回 イギリス女性史研究会「古典を読む会」
４．発表年 2020年

１．発表者名 長谷川貴彦
２．発表標題 「貧困」と「福祉」の歴史学 イギリス近現代史の経験から
３．学会等名 ジェンダー史学会第18回年次大会シンポジウム「貧困とジェンダー 「公助」の役割を問う」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小関隆
２．発表標題 人文学 beyond 2020 の可能性
３．学会等名 神戸女学院大学英語英文学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 市橋秀夫
２．発表標題 階級、交友、『体験感受力』- 日本における1960年代の青年労働者
３．学会等名 日英共同研究ワークショップ III　オンライン 公開講演会「文化と階級：EP トムソン再考」（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 長谷川貴彦、岩下誠、浜井祐三子,梅垣千尋、尹 慧瑛、市橋秀夫、小関隆(発表順)
２．発表標題 サッチャリズムの歴史的前提：民衆的アーカイヴによる1970年代の再検討
３．学会等名 第72回日本西洋史学会大会・シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 長谷川貴彦
２．発表標題 社会史からのコメント：「生きること」の経済史学 ―「再生産と生活の接点」に視点をあわせて―
３．学会等名 政治経済学・経済史学会、秋季学術大会、
４．発表年 2019年

１．発表者名 小関隆
２．発表標題 「大戦後」を考える
３．学会等名 九州歴史科学研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩下誠
２．発表標題 アイルランド国民学校制度の宗派化に関する一側面―私設公営学校(non-vested school)の導入と展開―
３．学会等名 教育史学会第63回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩下誠
２．発表標題 教育史研究はどのような意味において危機なのか
３．学会等名 教育史学会第62回大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 梅垣千尋
２．発表標題 ウルストンクラフトのフェミニズム：理性・徳・知識における平等
３．学会等名 お茶の水女子大学ジェンダー研究所セミナー：ブリテンにおける「リベラル・フェミニズム」再考（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計19件

1．著者名 恒木　健太郎、左近　幸村(長谷川貴彦担当、第2章 「転回」以降の歴史学――新実証主義と実践性の復権」)	4．発行年 2020年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 288
3．書名 歴史学の縁取り方	

1．著者名 メアリ・ウルストンクラフト著、清水和子・後藤浩子・梅垣千尋訳	4．発行年 2020年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 284
3．書名 人間の権利の擁護／娘達の教育について	

1．著者名 岩下 誠、三時 眞貴子、倉石 一郎、姉川 雄大	4．発行年 2020年
2．出版社 有斐閣	5．総ページ数 289
3．書名 『問いからはじめる教育史』	

1．著者名 Q. Edward Wang, Okamoto Michihiro, Li Longguo (Takahiko Hasegawa、The Return of Narrative and Subjectivity: Historiography After the Linguistic Turn)	4．発行年 2022年
2．出版社 De Gruyter Oldenbourg	5．総ページ数 657
3．書名 Western Historiography in Asia Circulation, Critique and Comparison	

１．著者名 大門正克，長谷川貴彦編	４．発行年 2022年
２．出版社 日本経済評論社	５．総ページ数 343
３．書名 「生きること」の問い方	

１．著者名 小川幸司編　（長谷川貴彦担当「現代歴史学と世界史認識」）	４．発行年 2021年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 326
３．書名 講座世界歴史　第１巻　世界史とは何か	

１．著者名 成田龍一小川幸司編　（長谷川貴彦担当:第２章 近代の構造・近代の展開	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 363
３．書名 世界史を考える	

１．著者名 小関隆	４．発行年 2021年
２．出版社 中公新書	５．総ページ数 250
３．書名 イギリス1960年代：ビートルズからサッチャーへ	

1．著者名 R.J．エヴァンズ、木畑洋一、原田真見、渡辺愛子、芝崎祐典、浜井祐三子、古泉達矢訳	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 728
3．書名 エリック・ホブズボーム　歴史の中の人生　　上下	

1．著者名 長谷川貴彦編	4．発行年 2020年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 273
3．書名 エゴ・ドキュメントの歴史学	

1．著者名 小関隆	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 376
3．書名 越境する歴史家たちへ	

1．著者名 レオノア・ダヴィドフ＆キャサリン・ホール（梅垣千尋、長谷川貴彦他訳）	4．発行年 2019年
2．出版社 名古屋大学出版会	5．総ページ数 509
3．書名 家族の命運 ― イングランド中産階級の男と女 1780～1850	

1．著者名 タラ・ザーラ（岩下誠他訳）	4．発行年 2019年
2．出版社 みすず書房	5．総ページ数 488
3．書名 失われた子どもたち－第二次世界大戦後のヨーロッパの家族再建	

1．著者名 リン・ハント（長谷川貴彦訳）	4．発行年 2019年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 129
3．書名 なぜ歴史を学ぶのか	

1．著者名 小関隆	4．発行年 2018年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 360
3．書名 アイルランド革命 1913-23 第一次世界大戦と二つの国家の誕生	

1．著者名 山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史（共編）	4．発行年 2019年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 382
3．書名 われわれはどんな「世界」を生きているのか	

1．著者名 小関隆	4．発行年 2019年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 232
3．書名 人文学宣言(山室信一編，「作品としての人文学」を分担執筆144-147))	

1．著者名 浜井祐三子	4．発行年 2018年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 296
3．書名 ヨーロッパ・デモクラシー：危機と転換(宮島喬・木畑洋一・小川有美編著， 第7章「排外主義とメディア：イギリスのEU残留・離脱国民投票から考える」を分担執筆(173-195))	

1．著者名 浜井祐三子	4．発行年 2018年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 400
3．書名 食から描くインド：近現代の社会変容とアイデンティティ(井坂理穂・山根聡編著，「一口ごとに、故郷（ホーム）に帰る：イギリスの南アジア系移民マイノリティの紡ぐ食の記憶と帰属の物語」を分担執筆(199-228))	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小関　隆 (KOSEKI TAKASHI) (10240748)	京都大学・人文科学研究所・教授 (14301)	
研究分担者	岩下　誠 (IWASHITA AKIRA) (10598105)	青山学院大学・教育人間科学部・准教授 (32601)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	梅垣　千尋 (UMEGAKI CHIHIRO) (40413059)	青山学院女子短期大学・現代教養学科・教授 (42608)	
研究分担者	市橋　秀夫 (ICHIHASHI HIDEO) (70282415)	埼玉大学・人文社会科学研究科・教授 (12401)	
研究分担者	尹　慧瑛 (YOON HAEYOUNG) (70376838)	同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授 (34310)	
研究分担者	浜井　祐三子 (HAMAI YUMIKO) (90313171)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授 (10101)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	田村　理 (TAMURA TADASHI) (00768476)	北海道大学・文学研究院・専門研究員 (10101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関